



なぜあの人ではなく
私が生きている
のか



nullus

疲れた。

読み終えた時にまず感じたことである。

特に分厚いわけでもない。描写がきついわけでもない。

ただただそのテーマが抱えている重みを作者と分かち合ったというだけで、えも言われぬような疲労感に身動きがとれなくなった。

「なぜ、あの人ではなく、私が、生きているのか」

最初は「突き刺さる」ような感じだったが、次第にそれが「抉られる」ような感じに変わっていく……。

この史代の『この世界の片隅に』という作品は、はっきりと私の心に刻印を残していった。

作品の舞台は第二次世界大戦時の広島。

物語は主人公の少女の幼年時代のエピソードから始まる。

最初の三話ほどは、昭和初期のほのぼのとしたエピソードであるが、そこから先は話が急展開する。嫁入りから新婚生活の話さえも、あくまで物語の準備でしかなく、思っていたよりも話はずんずんと先に進んでいく。

ここまでの話だけでも十分に読ませるものがある。

しかし、この先に用意されている物語のすさまじさに比べれば、ここまではあくまで「準備」の部分に過ぎないのだ。

ここから先は、「物語」でありながら、もはや単にその展開を順を追って眺めていくような「ストーリー」の領域を超えている。

本来人が持っているチカラ、純粋な思い。

しかし、それを容赦なく叩き潰す暴威、そして喪失……。

良き者は逝き、自分だけが残される。

なぜあの人は死んでしまったのか

なぜあの人ではなく私が生きているのか

なぜあの人は私にやさしくしてくれるのか

そもそも私は生きる価値があるのか

なんで私は生きているのか

答のない問いかけで頭の中が埋め尽くされる。

しかし、目を背けてはならない。生きるとはそういうことなのだから。

全てを背負って生きていく。その覚悟が問われているのだと気づく。

問いかけは渦を巻き、螺旋を描き、同じところを回りながら終わりのない下降を続ける。その

思考は危険ですらある。

だが、時には眠れぬ夜を過ごすことも必要なのだろう。

いなくなってしまった人たちのためにも。